チベット自治区博物館蔵五言語合璧『如來大寶法王建普度大齋長巻画』（1407年）のモンゴル語テキストについて

松　川　　節

はじめに

チベット自治区・ラサ市のチベット自治区博物館には，明初に著わされた『如來大寶法王建普度大齋長巻画』（通称『奇蹟の絵巻①』）という絵巻物が所蔵されている。絵巻物には，明の永楽帝の招聘に応じて南京に入京したチベット仏教カルマ派の第５代活仏テシンシェクパ De bzhin gshegs pa が，永楽５年（1407年）二月五日から三月十八日にかけて南京近郊の靈谷寺で「普度大齋」を行なったその一部始終が，22日間にわたり，計49の場面②に分けられ，極彩色で描かれている。作風は明朝初期の宮廷絵画に類する。注目すべきは，各日付ごとに，それぞれ５つの言語・文字によるかなり詳細な解説が付されていることである。本稿では，この絵巻物の来歴，研究史，言語文献学的特徴，歴史的背景に言及しつつ，今までまったく研究されてこなかったモンゴル語テキストの最初の部分を解読し，あわせてその資料価値を考察したい。

１．資料の現存状態

本資料は，チベット自治区博物館（ラサ市）の２階北側展示室に展示中であった（2002年３月現在）。長巻は，目測で幅65センチ，長さは公表値で50メートルに及ぶという長大なものであるが，そのうち，巻頭から10メートル程度のみがガラスケースの中に展示されており，残りは巻きとられたままの状態のため見ることができなかった。絵画は紙本着色で，絹で裏打ちされている。展示されているのは５番目の日付（永楽５年二月九日）までであった。保存状態は概ね良好であるが，文字テキストの部分については部分的な損壊により解読できないところもあり，また，ガラス越しの解読は極めて困難で

ある。

2．発見の経緯と研究史

2001年９月，筆者はラサ市における現地調査の際に，チベット自治区博物館にて本資料を偶然目睹した。[③] 帰国後，本資料に関する先行研究を調査した結果，すでに半世紀前にその存在が知られていたことが判明した。

本資料について最初に詳細な報告を行なったのは，チベット学者リチャードソン Richardson である。彼はチベット仏教カルマ派に関する包括的な研究を進めるなかで，ラサ北西70キロにあるツルプ mThur phu 寺（カルマ派の総本山；標高4480メートル）にて1949年にこの『奇蹟の絵巻』を実見した。このとき，原資料に就いて録文をすることは能わなかったが，後にチベット語部分の「写し」を当時のカルマ派活仏から受け取り，これに基づいてチベット語部分の転写と英語訳を1958年に発表した［Richardson 1958/59］。資料の情報として，彼は次のように記述している：

> *The events of the ensuing visit are described at length in a remarkable Imperial decree which was shown to me at mTshur-phu in 1949. It is contained in a silk-backed scroll some 50 feet long by 2.5 feet high composed of sections of text beautifully written in five scripts— Chinese, Tibetan, Arabic, Mongol, and Uighur— alternating with panels painted in the meticulously elegant Ming style. ...* [Richardson 1958, p.148.]

このとき，絵巻物の冒頭部の白黒写真２葉も公表された。そこに書かれている５種類の文字のうち，３つまでは漢字，アラビア文字，チベット文字であることが写真から容易に判別できる。しかし，残る２種類の文字がリチャードソンの言うとおりモンゴル文字とウイグル文字であるかは，写真の解像度が不足しているため検証不可能である。

ところで，リチャードソンの論文が発表された1950年代末～60年代にかけて，日本でも明朝とチベットの関係に関わる研究が盛んに行なわれた。その嚆矢として，大谷大学の滋賀高義は，「明の成祖と西蔵――哈立麻の来朝を中心として――」を発表し，１）明の成祖永楽帝の招聘に応じてカルマ派第５代活仏テシンシェクパが永楽５年（1407）正月に入京し，２）テシンが永楽帝より「萬行具足十方最勝圓覺妙智慧善普應佑國演教如來大寶法王大善自在佛」なる法号を与えられたこと，３）永楽５年（1407）年二月五日に南京

近郊の靈谷寺で，明の太祖とその皇后である孝慈高皇后の追善供養を行なったことを明らかにし［滋賀1961］，さらに佐藤長は，「元末明初のチベット状勢」で，4）その追善供養の一部始終を絵画に記したのがリチャードソン氏紹介の『奇蹟の絵巻』であること，5）こうした一連の史実は『明史』，『清涼志』，『御製靈谷寺塔影記』などの漢文史料のみならず，チベット語年代記『ケーペーガトン』によっても確認できることを明らかにしたのである［佐藤1963］。

一方，美術史の観点から，ヒーザー・カルメイ Heather Karmay は *Early Sino-Tibetan Art* においてリチャードソン論文を引用しつつ『奇蹟の絵巻』の存在に言及したが，実物を参照することはできなかったようである［Karmay 1975, p.79］。

1992年，北京で出版されたカラー写真集『西藏文物精粋』において，『奇蹟の絵巻』のカラー写真の一部が公表された（冒頭部分4片のみ）［西藏自治區文物管理委員會（編）1992］。おそらくこれと前後して中国で本格的な研究が始められたのであろう。その成果として，羅文華 Luo Wenhua による「明大寶法王建普度大齋長巻」が1995年に発表され，『奇蹟の絵巻』の漢文とチベット文テキストの全著録が公けにされたのであった［羅1995］。漢文テキストの著録が発表されたのはこれが初めてである。また羅論文は，本資料が1959年にツルプ寺からラサ市内のノルブリンカに移管されたことを伝えている。

こうした経緯を踏まえて，乙坂智子は「永楽5年「御製靈谷寺塔影記」をめぐって――明朝によるチベット仏教導入の一側面――」を発表し，本資料の研究史にも詳しく言及しつつ，永楽政権の政治状況とチベット仏教の関係に新たな知見を提示した［乙坂1997］。

2000年，ついに『奇蹟の絵巻』全部分のカラー写真が公刊された。『寶藏・中國西藏歴史文物精華』第3巻（元・明巻）に収められたものである［甲央・王明星（主編）2000］。

2002年3月，筆者はチベット自治区ラサ市において2度目の現地調査を行ない，本資料の展示されている部分について，既発表のカラー写真では判読できない箇所の解読を試みた。ガラス越しという制限はあったが，いくつかの疑問点が解消された。

2002年8月，第8回国際モンゴル学会（於：ウランバートル）において，

筆者は『奇蹟の絵巻』第１部分のモンゴル文テキストの解読を世界に先がけて口頭発表した［Matsukawa 2002］。

以上，20世紀になってからの『奇蹟の絵巻』の発見と研究経緯の概略を記した。なお，それ以前の所在情報としては，清代に編纂された『衛藏通志』巻一「考証」に，本資料がツルプ寺に所蔵されているとの考証があることが夙に指摘されている［佐藤1963，註(68)；羅1995，p.90］。

3.「5言語」について

本資料は，その各場面を描写する解説が５つの言語・文字でそれぞれ記されていることより，15世紀前半の文字資料としても大きな価値を持っている。しかしながら，この５つの言語・文字がそれぞれ何であるか，先行研究の見解は一致していない。先述のように，この資料を最初に紹介したリチャードソンは，「漢字・チベット文字・アラビア文字・モンゴル文字・ウイグル文字」とし，言語については，「チベット語テキストは漢文原文からの一節ごとの翻訳のようであるが，正規の【チベット語の】文法や語用法から多くの逸脱があり，チベット人の所作ではありえない」とだけ述べた。残る３つの文字については，それが何語であるか何も言及されていない［Richardson 1958, p.148］。

羅文華は「漢，察合台文（古維吾文），回鶻文（？），蔵，回鶻式蒙古文五種文字」とし［羅1995，p.90］，『寶藏・中國西藏歴史文物精華』は「漢，藏，蒙等多種文字」とするのみである。

筆者が見たところ，５つの言語は右から左へ漢字漢語，アラビア文字トルコ語，古ビルマ文字ビルマ語（？），チベット文字チベット語，ウイグル文字モンゴル語であった。このうち，リチャードソンが「ウイグル文字」とし，羅文華が「回鶻文（？）」とする文字について，筆者は「古ビルマ文字ビルマ語」である可能性を新たに提唱したい。なぜならこの文字は，15世紀に明朝で編纂された対訳語彙集『華夷譯語』中の『緬甸館譯語』に使われる「緬甸文字」すなわち古ビルマ文字に極めて類似しているからである。因みに，『緬甸館譯語』は雑字（対訳語彙集）と来文（上奏文）から成り，ビルマ語を体系的に記録した最古の資料であるが，来文の部分は正文である漢文を緬甸文字で音写したものにすぎず，ビルマ語資料としてはほとんど価値がないといわれている［藪1992，p.596］。もし筆者の想定どおり，本資料の古ビル

マ文字の部分がビルマ語で書かれているとすると，我々は15世紀初頭の，最古期のまとまったビルマ語資料を手にしたことになる。今後の研究に俟ちたい。

4．モンゴル語資料としての特徴

本資料は，合計22日間の各斎事についてそれぞれ５つの言語で解説文が付されているが，そのうちモンゴル語の部分のみを取り出すと，計70行に及ぶ。15世紀初頭の，全70行に及ぶまとまった新出のモンゴル語資料として大いに注目に値する。なぜなら13～14世紀の最初期のモンゴル語資料は一定数伝存しているのに対して，15～16世紀はモンゴルの「資料的暗黒時代」と言われており，とくに15世紀のものは今まで数えるほどしか知られていなかったからである。

4．1　15世紀のモンゴル語資料

1368年に大元ウルスが中国支配を見限り，モンゴル高原に北帰すると軌を一にして，ユーラシア各地におけるモンゴル諸政権の求心力は急速に弱まり，モンゴル語による文書行政，宗教活動も次第に低調になっていった。そのなかで，東アジアでは，明朝が「北元」の残存勢力と直接対峙する必要に応じて，1382年に漢語・モンゴル語対訳語彙集『華夷譯語』（いわゆる甲種本）を編纂し，さらに『元朝秘史』漢字音訳本を刊行し，明の官僚のモンゴル語学習に供していた。また，明の洪武帝や永楽帝をはじめとする諸帝は大元ウルスの統治理念をそのまま踏襲し，中華の化外への詔勅・書簡の送付に当たっては，漢文によるものを正とし，それに外国語による訳文を付す形式を採った。こうした文字資料として，14世紀後半に洪武帝が送付したものが，原文の漢文と漢字音訳されたモンゴル語というかたちで甲種本『華夷譯語』に収録されている。一方，15世紀に繫年されるものとしては，1407年五月十一日付けで永楽帝が米里哈只 *Amīr Haji* に宛てた漢語・アラビア文字ペルシア語・ウイグル文字モンゴル語による三言語合璧諭旨（この文書のモンゴル語の部分は９行からなるが，公表されている写真からは残念ながら解読できない）［福建省泉州海外交通史博物館（編）1984，pp.8-9; figure 20］と，イスタンブールのトプカプ宮殿図書館に所蔵される，1453年十一月二十九日付けで景帝が咩力兒吉 *Yanglirgi* に宛てた漢語・ウイグル文字モンゴル語二言

語合璧勅諭［Cleaves 1950］のみが知られている。

15世紀に繫年されるモンゴル語資料として，もう一点，四言語合璧『諸佛菩薩妙相名號經咒』が存在する。宣徳6年（1431年）に北京で木版印刷されたもので，諸佛菩薩の像が描かれるとともに，漢語・ランツァ文字サンスクリット語・チベット語・ウイグル文字モンゴル語の四言語でダラニなどが書かれている［Karmay 1975, pp.63-71, Heissig 1976］。15世紀前半の北京におけるチベット・モンゴル仏教の状況を示す貴重な資料である。

西アジア・中央アジアでは，アラビア文字で書かれたアラビア語・ペルシア語・チャガタイ語・モンゴル語対訳語彙集『ムカッディマト・アル・アダブ』が1492年に書写されている。モンゴル語の部分がこのとき初めて編纂されたのか，以前から成立していたかを知る手がかりは残されていない。いずれにしても，13～15世紀の「中期モンゴル語」を伝えるまとまった貴重な資料である［Поппе 1938-39］。

こうした資料状況に鑑みると，本資料の出現により15世紀のモンゴル語資料，特に数少ないウイグル文字モンゴル語資料は，量として一挙に倍増したといえる。

4.2　言語学的特徴から見た資料の成立年代

本資料は1407年二月～三月に挙行された「普度大齋」のようすを描写したものであるが，序跋に類するものが一切書かれていないため，正確な成立年代はわからない。あるいは後代の成立とみる向きもあるかもしれない。しかしながら，モンゴル語部分の古文字学的・正書法的特徴は，17～18世紀のいわゆる「古典期モンゴル文語」の規範から大きく逸脱しており，本資料が紛れもなく先古典期モンゴル語時代（13世紀～15世紀）のものであることを証明している。

以下，古文字学的特徴を指摘しよう。

(1)　語中のjとčを区別せず，いずれも同型のC文字で表わす。

(2)　語中の母音字の前でT文字を使うことがある。

(3)　語頭のyをY文字で表わしている。

(4)　ong（＜Chin. wang「王」）は17世紀以降になるとβ'NKと綴られるようになるが，ここでは13～14世紀の綴り方と同じく'WNKである。

(5)　γやnに点が付されない。

(1)

'WYC'KD'CW
üǰegdeǰü

(1)′

X'RCW
γarču

(2)

M'TW
me̱tü

(3)

YWNK L'W
Yong lau

(3)′

Y'RW
yerü

(4)

'WNK
ong

(5)

TWNYLX'N
tonilγan

(6)

''NKXY
angγi

(7)

'WYDWR
üdür

(8)

Z-WW L'Y
Ž-ou lai

(6) 後舌の母音調和を持つ単語において，母音 i の前に後舌子音文字Xが書かれることがある。13～14世紀に特徴的な書き方であり，17世紀以降の古典期モンゴル文語においては，前舌子音文字K＋Yという形に統合されていくものである。

(7) 17世紀以降の古典期正書法で edür「日」と綴られる単語が，ここでは13～14世紀に特徴的な綴り方 üdür で現われており，この単語の第一音節の母音は15世紀前半においても円唇であったことを示している。④

(8) 漢字「如」をウイグル文字で音写する際に，13～15世紀のウイグル文字モンゴル語文献には見られない「単語末以外のＺ文字」が使われている。13～15世紀のウイグル文字モンゴル語文献において，Ｚ文字はもっぱら単語末の s 音を表わすために用いられた（例：ČYNKKYZ / J̌inggis「ジンギス」）。元々はウイグル文字を借用した際に，ウイグル語の語末の z がモンゴル語では s に対応するところから始められた表記法であるが，モンゴル語は語末に z 音を持たず，必ず s 音になるため，次第にＺ文字は使われなくなり，Ｓ文字で代用されるようになっていく。

一方，ここで漢字「如」の音写のためにＺ文字が使われているのは，その音価が ʑ であることを示す「ウイグル的伝統」が適合されたのであろう。⑤

これらの古文字学的特徴は，この資料のモンゴル語の部分が13～14世紀の

ウイグル文字モンゴル語の綴り字をよく保存していることを示している。つまり，本資料の成立年代が，記録される「普度大齋」の挙行された1407年よりさほど離れていない，同じ15世紀の前半であるということの有力な証拠のひとつになっているといえよう。

5．モンゴル語テキスト（第1部）

0101 T'Y MYNK X'X'N.
Dai Ming qaγan,
大 明 皇帝 は

0102 Z-WW L'Y T'Y P'W β' 'WNK T'Y S'N SY S'Y PWRX'N
Ž-ou lai tai bau va ong dai san si sai burqan
如 來 大 寶 法 王 大 善 自 在 佛

K'RM-' P'-YY KWYR'CW 'YR'KWLCW. T'L'K'Y
garm-a ba-yi küreǰü iregülǰü, delekei
哈立麻 巴を 至り 来させて 世界

T'K'R'KY Y'RW TWYYT-Y "X'L'N 'WDWR///CW
degereki yerü toyid-i aqalan udur [id] ču
における 全ての 僧衆を 領 導 し,

LYNKKW SY SWYM-'-TWR PWW TW T'Y C'Y
Linggu si süm-e-t̲ür buu tu dai čai
霊谷 寺 寺において 普 度 大 齋

K'M'KW Y'K' PWY'N 'KWSK'CW
kemekü yeke buyan egüskeǰü
という 大いなる徳行を 起こし,

0103 *X*'X'N 'CYK' T'YSWW Y'K' X'X'N.
*qa*γan ečige Taisuu yeke qaγan,
皇帝の 父なる 太 祖 大 皇帝

0104 *X*W SY XW XWNK XYW 'K' YWK'N TWL'. P' T'L'K'Y-YYN

*q*o si qo qong qiu eke-yügen tula, ba delekei-yin

孝 慈 高 皇 后 母(←自分の)のため, 我が 世界 の

X'R'NKXW-TWR TWYKWRYKS'T SWYR SWYN'SWN-Y

qarangγu-t̲ur dügürigsed sür sünesün-i

暗黒 に 満ちた者たち(の) 魂 魄 を

TWNYLX'N. YWNK L'W T'PDWX'R 'WN XWY'R

tonilγan, Yong lau tabduγar on qoyar

救済し, 永 楽 5 年 二

S'R'-YYN T'PWN SYN'-'C' PWY'N 'KYL'KS'N-'C'

sara-yin tabun sine-eče buyan ekilegsen-eče

月 の 五日 (←初旬の)より 徳行を 始めてより

'NK TWYRWN-W 'WYDWR T'PWN 'WYNKK'TW

eng türün-ü üdür tabun öngget̲ü

最 初 の 日に 五 色持つ

0105 '*W*YL*C*'Y-D'N 'KWL'T 'WL'N ''NKXY T'NKSWX-'

*ö*lǰei-d̲en egüled olan angγi tangsuγ-a

吉祥 持つ 雲々(の) 大 群が 美妙 に

'WYC'KD'CW. 'WRPYNYN P'RYLDWN X'RCW

üǰegdeǰü, orbinin barildun γarču

現われ, 縛(もつ)れ(?) 引き合って 出現し,

CYND'M'NY M'TW PWLWN SWPWRX'N-W

čindamani met̲ü bolun suburγan-u

如意宝 のように なって, 仏塔 の

'WKY-TWR S'RYL 'WYC'KD'N 'WRXWXW S'R'

oki-ṯur　šaril　üǰegden　urγuqu　sara

尖端に　舎利 が　現われ，　昇る　月

K'K'K'N-' KYLP'LWN KWYDWLP'Y. P'S' ''LD'N

gegegen-e　gilbelün　küdülbei,　basa　altan

光 に　輝きつつ　動き始めた。　また　金の

K'R'L XWY'R Y'RK' 'WYC'KD'P'.

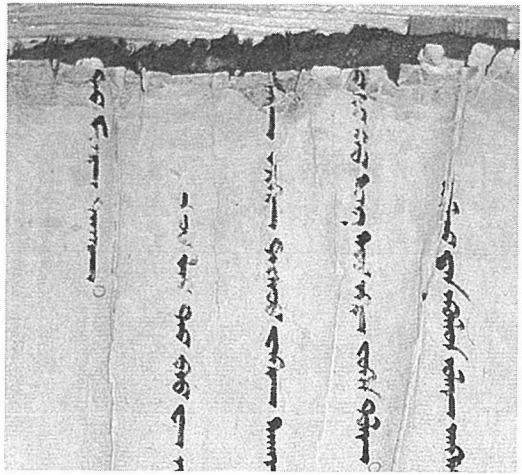
gerel　qoyar　ǰerge　üǰegdebe,

光 が　2つ　並んで　現われた。

語註

0102 Ž-ou lai tai bau va ong dai san si sai burqan: カルマ派第5代活仏テシンシェクパに明の永楽帝が与えた称号「萬行具足十方最勝圓覺妙智慧善普應佑國演教如來大寶法王大善自在佛」のうち，「如來大寶法王大善自在」の部分がウイグル文字で音写されたもの。「佛」のみは burqan と翻訳されている。対応するチベット語テキストでは「佛」も含めて gzhu'u la'i ta'i ba'u hwa wang ta'i shen tsi tsa'i hu'o と，全て音写されているのと対照的。なお，この間の経緯については，滋賀1961，佐藤1963を参照。 **buu tu dai čai kemekü yeke buyan:**「「普度大齋」という大いなる徳行」。チベット語テキストでは，cho ga chen po「大法事」とするのみ。 **0104 *q*o si qo qong qiu:**「孝慈高皇后」（太祖の皇后の諡号）の音写。冒頭のX文字は欠けているが，文脈上間違いない。チベット語テキストは byams pa'i yum btsun mo「慈悲深き母后」とするのみ。 **ba delekei:**「我が世界」。ba は一人称複数代名詞（排除形）。 **qarangγu:**「暗黒」。 **eng türün-ü:**「最初の」。türün は『モンゴル秘史』に1）türün 禿舌侖（§111，旁訳は「初」） 2）türün-ü 土舌魯訥（§153，旁訳は「始初的」）とあらわれ，14世紀後半の成立と思われる『蒙漢合璧孝経』にも，漢文原文「夫孝始於事親」に対して，ウイグル文字モンゴル語で taqimdaγu kemebesü ạng *türün* ečige eke-degen tabiγlaqu と在証されている［2b, ll.5-7］。 **0104-05 tabun önggeṯü *öl*ǰei-ḏen egüled olan angγi:**「五色持つ吉祥持つ雲々（の）大群」。***öl*ǰei-ḏen**「吉祥持つ」はテキストが写本の折り目にかかっているため，既発表の写真でも実見でも判読しにくいが，漢文「卿雲」の「卿」（＝めでたい）を翻訳したものと見て間違いない。チベット語テキストは sprin 'ja' kha dog sna lnga「五種類の色の彩雲」とするのみ。 **0105 orbinin barildun:**「縛れ（？）引き合って」*orbini- は在証されない単語。漢文の「紛騰涌凝」，チベット文の

モンゴル語テキスト第１部分
（甲央・王明星（主編）2000，p.95）



モンゴル語テキスト第１部分の冒頭

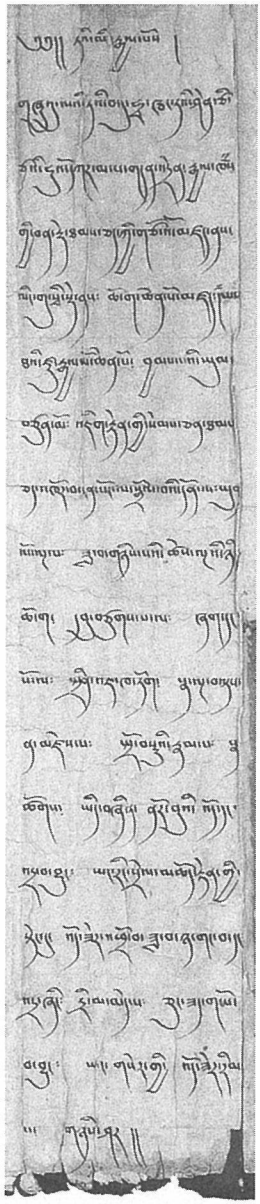
spro bsdu'i rnam pa「離合する様子」を勘案すると，orbuyi-「縛れる」と関連する単語か？

おわりに

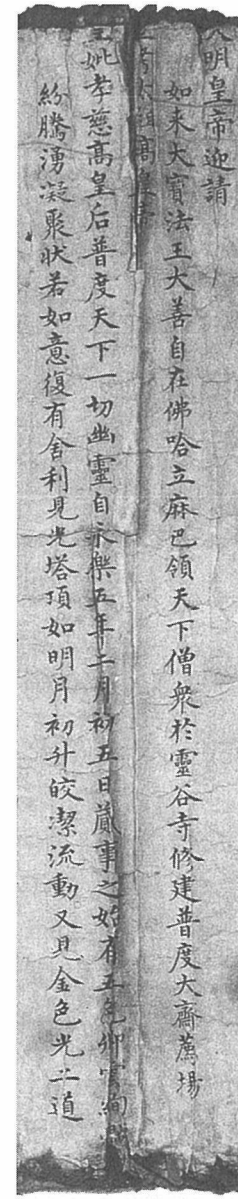
本稿の主目的は，本資料の５言語テキストのうちモンゴル語部分の解読を初めて公表することにあったが，最後に，本資料が持つ多方面にわたる資料価値について研究展望を述べておきたい。

本資料で描写される1407年の「普度大齋」については，その歴史的意義付けがリチャードソン，滋賀，佐藤によって明朝の対チベット政策という枠組みのなかで検討された。これに対して乙坂が，明朝，とくに「永楽政権それ自体の儀礼，すなわち，国内外に向けてみずからの政治権力を表現するための象徴体系に関わる」事件［乙坂1997，p. 11］と捉えている点は注目にあたいする。なぜな

大明皇帝迎請
　如来大寶法王大善自在佛哈立麻巴領天下僧衆於靈谷寺修建普度大齋薦揚
皇考太祖高皇帝
皇妣孝慈高皇后普度天下一切幽靈自永楽五年二月初五日蔵事之始有五色卿雲絢爛
　紛騰涌凝聚狀若如意復有舍利見光塔頂如明月初升皎潔流動又見金色光二道



チベット語テキスト第１部分
（甲央・王明星（主編）2000，p.95）



漢語テキスト第１部分
（甲央・王明星（主編）2000，p.95）

ら，大元ウルス期から明代を経て清代に至るまで，東アジアにおける王権が，チベット仏教を象徴体系として内在せしめることによってはじめて正当化されるとみなすならば，本資料が漢語，トルコ語，ビルマ語，チベット語，モンゴル語という５つの文字・言語で作成された理由は，同じ1407年に四夷館が設立され，これらの外国語を操る「通事」が育成されはじめたことと連関するのみならず，チベット仏教儀礼を明朝公認の象徴体系として対外的に誇示した永楽政権の権力構造とも関わるものとして検討する課題となりうるからである。

次に，言語文献学的資料としての側面。本資料が15世紀のモンゴル語文献として大きな資料価値を持つことは先述のとおりだが，15世紀の５言語合璧資料としての価値はそれ以上に高い。また，漢語以外の４言語のテキスト中には漢語からの音写語が多数含まれているため，各言語における漢語の音写体系は，中原音韻で代表される当時の漢語音の再構にも寄与するであろう。

これと関連して，本資料の各言語テキストがどのような順番で訳成されたかという問題も興味深い。上述のように，漢語以外の４言語のテキスト中には漢語の固有名詞が多数音写されているので，漢文テキストが原典であることは疑いない。一方，語註で検討したモンゴル語テキストとチベット語テキストについては，相互に対訳関係が見られないため，それぞれ漢文原典から独立して訳成されたものと思われる。

第３に，本資料は15世紀の絵画資料として中国美術史の方面からも注目を集めることが予想される。

本稿で扱ったのは５言語のうち漢語・モンゴル語・チベット語部分のみであり，それも全体の22分の１にすぎない。残りの部分の解読は今後の課題としたい。

註

① 本資料は研究者・書物により様々な名称で呼ばれているが，ここでは最初にリチャードソンが *Great Scroll* と呼んだものを佐藤長が「奇蹟の繪巻」と訳したところに従う。

② 日付によっては複数の場面が描かれている。以下，括弧内はその日付に付された絵画の枚数である。

１．永楽５年二月初五日(1)　２．二月初六日(2)　３．二月初七日(1)
４．二月初八日(1)　５．二月初九日(1)　６．二月十日(1)

7．二月十一日(1)　8．二月十二日(1)　9．二月十三日(2)
10．二月十四日(5)　11．二月十五日(4)　12．二月十六日(1)
13．二月十七日(2)　14．二月十八日(6)　15．三月初三日(8)
16．三月初四日(3)　17．三月初五日(3)　18．三月十三日(1)
19．三月十五日(1)　20．三月十六日(1)　21．三月十七日(2)
22．三月十八日(1)

③　資料の所在については，現地にて共同研究を行なった三宅伸一郎氏（大谷大学）よりご教示いただいた。記して感謝の意としたい。

④　服部1941（＝1986，pp.388-393）及び松川1995，pp.110-111参照。

⑤　じっさいにはウイグル語文献に導入された漢語のʒ音はZ，S，Šと様々な文字で表記されるが，本資料ではZ文字が適用されたと見なしておく。なお，語中であってもZ文字のあとでいったん筆を中絶し，Z-WWとする綴り字法は，ソグド・ウイグル起源である。

参照文献

Berger, P. "Miracles in Nanjing: An Imperial Record of the Fifth Karmapa's Visit to the Chinese Capital," in: M. Weidner (ed.), *Cultural Intersections in Later Chinese Buddhism.* Honolulu 2001, pp. 145-169, -8 pls.

Cleaves, F. W. "The Sino-Mongolian Edict of 1453 in the Topkapı Sarayı Müzesi," *HJAS* 13, 1950, pp.431-446, + 8 pls.

福建省泉州海外交通史博物館（編）『泉州伊斯蘭教石刻』福州 1984.

服部四郎 「蒙古語の口語と文語」1941.（再録：『服部四郎論文集第一巻アルタイ諸言語の研究I』1986，pp.355-404.）

Heissig, W. "Zwei mutmasslich mongolische Yüan-Übersetzungen und ihr Nachdruck," *ZAS* 10, 1976, pp.7-115, -23 pls.

甲央・王明星（主編）『寶藏・中國西藏歴史文物精華』(*Precious Deposits: Historical Relics of Tibet.* 5 vols) Beijing 2000.

Karmay, H. *Early Sino-Tibetan Art.* Warminster 1975.

羅文華 「明大寶法王建普度大齋長卷」『中國藏學』1995-1，pp.89-97.

松川節（評）「D. Cerensodnom & M. Taube, *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung.*」『東洋史研究』54：1，1995，pp.105-122.

Matsukawa, T. "On the Mongolian part of *The Great Scroll* granted by Ming emperor *Yong le* to Karma pa *De bzhin gshegs pa* in 1407." (Paper presented at the 8th International Congress of Mongolists held at Ulaanbaatar, August 5-12, 2002, 4 pp.)

乙坂智子 「永楽5年「御製霊谷寺塔影記」をめぐって――明朝によるチベット仏教導入の一側面――」『日本西蔵学会会報』41/42，1997，pp.11-23.

Поппе, Н. Н. *Монгольский словарь Мукаддимат ал-адаб*. Москва-Ленинград 1938-39.

Richardson, H. E. "The Karma-pa Sect. A Historical Note," *JRAS* 1958: 3/4, pp. 139-164, + 5 pls, 1959: 1/2, pp.1-18.

佐藤長「元末明初のチベット状勢」『明代満蒙史研究』京都，1963，pp.485-585.

滋賀高義 「明の成祖と西蔵――哈立麻の来朝を中心として――」『大谷史学』 8，1961，pp.44-57.

西藏自治區文物管理委員會（編）『西藏文物精粹』（*A Well-Sellected Collection of Tibetan Cultural Relics.*) Beijing 1992.

藪司郎 「ビルマ語」『言語学大辞典』（第3巻）1992，pp.567-610.

（附録）

チベット語テキスト（第1部）

※括弧内の数字は，漢文・モンゴル文テキストの行との対応を示す。

※チベット語テキストはすでに Richardson 1959に転写と英語訳があり，羅1995に著録があるため，ここでは転写のみ示す。

(0101) ta'i ming rgyal pos /
(0102) gzhu'u la'i ta'i ba'u hwa wang ta'i shen tsi
tsa'i hu'o dkar ma pa gdan 'dren rgyal khams
gyi ban rde thams cad kyi gtso bo mdzad nas /
ling gu swi sde nas / cho ga chen po mdzad / (0103) ya
tha'i dzu rgyal po chen po / byams pa'i (0104) yum /
btsun mo / 'jig rten gyi sems can thams
cad 'khor ba ngan song la sgrol ba'i don la / yun
lo lnga pa / zla ba gnyis pa'i tshes lnga'i nyin
cho ga / dbu btsug pa la / zhag dang
bo la / sprin 'ja' kha dog / sna lnga (0105) bltas
na mdzes pa / spro bsdu'i rnam pa / sna
tshogs / yid bzhin / nor bu'i 'od dang
'dra ba byung / yang ring srel mchod rten gyi
steng du / 'od zer 'phro ba / zla ba nya gang ba dang
'dra zhing / dri ma med pa / cung zad g-yo
ba byung / yang gser gyi / 'od zer rim
pa / gnyis shar //

（本学専任講師　東洋史学）

〈キーワード〉カルマ派，永楽帝，仏教学